

Title	古版経済書解題 一千八百三十一年版リチャード・ジョーンズ著 富の分配及び課税の諸源泉に関する一論、第一部、地代
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.7 (1941. 7) ,p.900(90)- 921(111)
JaLC DOI	10.14991/001.19410701-0090
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410701-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古版經濟書解題

一千八百三十一年版リチャード・ジョーンズ著『富の分配及び課税の諸源泉に關する一論、第一部、地代』

高橋誠一郎

デーヴィッド・リカードオの『經濟原理』が初めて出版せられた一千八百十七年から、ジョン・スチュアート・ミルの『經濟原理』の初版が公にせられた一千八百四十八年に至る間に介在する期間は、時代其の者が、多くの點に於いて、リカードオの偉著を産んだ時代の繼續であつただけに、經濟學說史上に於いても、新原理の發見よりも、寧ろリカードオの所論を祖述し繼承するを旨とした其の亞流によつて占領せられて居つた時代であると言はれてゐる。洵に、此の期間に於いては、リカードオの理論は絶大なる勢力を以つて經濟思想界に君臨し、其の直接後繼者等は致々汲々として彼れによつてポピュラーならしめられた方法に従つて抽象的論述を行ふことを宗とし、只管、彼れの學說を解説し敷衍しつゝあつたのである。然しながら、此の時代に於いて、一方にはロバート・オーエン及び過激なる勞働運動の指導者等が、リカードオによつて代表せらるゝ全思想體系を敵視し、之れを排撃せんことを努む

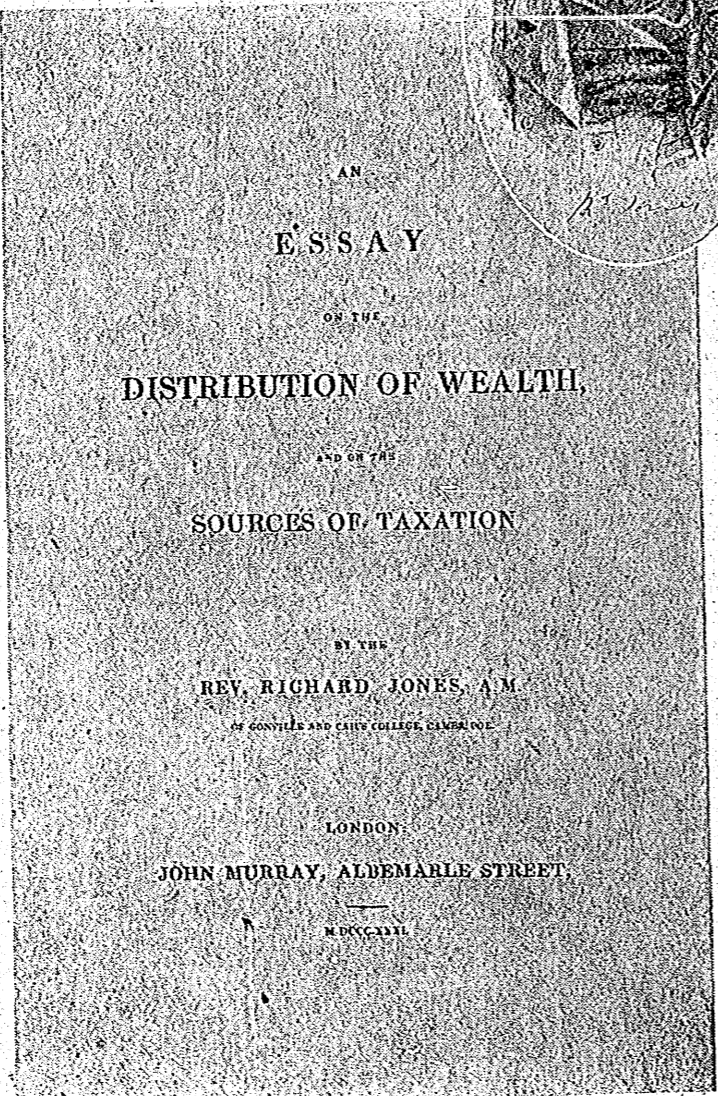
ると共に、他方には又、トマス・ロバート・マルサスを初めとして、一部の經濟學者等が幾多の點に於いてリカードオ學說と一致しながらも、諸他の點に於いては之れに對して異議を唱へ、其の修正を主張して、這般の經濟理論の中に潜む階級的對立關係の不可避性と非妥協性とを免れんことを期しつゝあつた事實を注意しなければならぬ。斯くの如き時代に在つて、正統學派の圏外に立ち、力強く其の一般的態度を拒否して、歴史的方法を主張し、統計の重要性を強調し、而して人間の行動に及ぼす過去の經驗及び社會制度の影響を力説せる者に、リチャード・ジョーンズ(Richard Jones)があつた。ジョーンズはリカードオの地代學說に對する批評家として最も廣く知られる所であつて、其の主著は實に劍橋に於いて同大學御用印刷者ジョン・スミス(John Smith)によつて上梓せられ、一千八百三十一年、倫敦アルバマルル街ジョン・マレー(John Murray)から出版せられた『富の分配及び課税の諸源泉に關する一論、第一部、地代』(An Essay on the Distribution of Wealth, and on the Sources of Taxation, Part I—Rent.)と題するものである。本書は序文及び目錄四十九頁、本文三百二十九頁、附錄四十九頁より成る八折判一卷である。劍橋大學附屬出版局特別評議員は此の書の印刷費を引き受けた。斯くの如き例は、殊に同大學の成員の著した良書に對しては之れを見ることが稀ではなかつたのである。

此の書は一千八百四十四年、新版を出し、更らに一千八百九十五年、アッシュリー教授の Economic Classics 叢書中に其の抜萃版 *Peasant Rents, being the first half of an Essay on the Distribution of Wealth and on the Sources of Taxation.* が加へられた。

二

リチャード・ジョーンズは、一千七百九十年、倫敦の南東三十一哩の地點に在るケント及びサッセックスの都市

タンブリッジ・ウエルズに生れた。彼れの家はウエールズ出であつて、其の體內にはケルト民族の血が流れて居つた。彼れの生地タンブリッジ・ウエルズは一千六百〇六年の頃に發見せられた鐵鑛泉で有名な盛り場であつて、彼れの父は此の町で辯護士をして居つた。彼れ自身も亦、法律を以つて一家を成さんことを志望し、其の明敏なる頭腦と旺盛なる氣力と生得の雄辯とは又、此の方面に於いて成功を贏得せしむるに充分なるものがあつたのであるが、而も、其の健康上の缺點は終に彼をして他の進路を取ることを決意するの已むなきに至らしめ、僧侶たらんとするの目的を以つて劍橋に送られた。彼れは一千八百十二年十月、一般入學年齢より稍や後れて、ケーヤス・コレッジに入り、一千八百十六年、文學得業士と爲つて、聖職を授けられ、一千八百十九年には文學士と爲つた。彼れは最初サッセックス郡に於ける牧師補職に任命せられ、一千八百二十二年、ウエストハムに近いケント郡ブラステッドの牧師補と爲り、翌二十三年、ブライトン、クインス・パークのトマス・アツツリイ(Thomas Attree)の妹シャーロット(Charlotte)と結婚した。彼れの主著『富の分配』は實にブラステッドに於いて構成せられるに至つたものである。而して此の地に在つて、彼れは又、幾多の崇高なる大著述の計畫を建てたのである。然しながら、漸次、實際的活動に對する興味と更らに世間的なる生涯に對する刺戟とは、思索と著述の快味に打ち勝たんとするに至つた。彼れが其の『國民經濟學』(Political Economy of Nations)を草するが爲めの資料として集積した夥しき高に達する事實と是れ等の事實と結合して其の腦裡に宿して居つた幾多の斬新奇抜なる思想系列とを知る者は、其の著『富の分配』完成の希望が徐々に消滅しつゝあつたことを遺憾とせざるを得なかつたのである。而も、彼れの實際的勞作は其の理論的知識と緊密に結合せられ、洵に又、是れよりして成育せるものであつた。(Rev. William Whewell, Prefatory Notice to "Literary Remains, consisting of Lectures and Tracts on Political Economy of the Late Rev. Richard



Jones, 1859, p. xxii.)

ジョーンズは、一千八百三十三年、倫敦の新設キングス・コレッジの經濟學教授に任命せられ、同年二月二十七日に其の序講を行つた。其の後幾許ならずして八折判として倫敦で出版せられた *An Introductory Lecture on Political Economy, delivered at King's College, with a Syllabus of a Course of Lectures on the Wages of Labour.* が是れである。彼れは又、同年、倫敦に於て *A few Remarks on the Proposed Commutation of Tithes.* と題する八折判一巻を出版した。

彼れは既にヘイリイベリーの東印度學校を訪れ、同校教授マルサスと面識を有して居つたのであるが、マルサスが一千八百三十四年十二月を以つて長逝するや、彼れは翌三十五年三月、其の後繼者として同校に於ける經濟學及び歴史の教授に任命せられた。此の學校は東印度會社によつて、一千八百〇五年、倫敦に近いハートフォード近郊のヘイリイベリーに設けられたものであつて、同會社の役員たる可き青年にコレッジ教育を施すを以つて目的とせるものである。此處に彼れの先任者マルサスは長閑に其の終生の事業に従事す可き安住の地を看出して居つたのである。ジョーンズが其の後繼者に任命せられたのは、形式上では理事會 (Court of Directors) に於いてであつたが、實際には同會長セント・デーヂ・タッカー (St. George Tucker) の手に於いてあると解せられてゐる。彼れは恰も理事會の廢止が問題と爲つて居つた際に任命せられたのであつて、彼れの最初の任期は單に一箇年に過ぎなかつた。而して、其の後幾許もなく十分一稅委員に任命せられたが爲めに彼れは辭表を提出するに至つたのであるが、理事會が留任を要望した爲めに、彼れは其の死の直前に至る迄、教授職に留まることゝ爲つたのである。(Whewell, *Op. cit.*, p. xxvi.)

ジョーンズは一千八百三十六年に於ける十分一稅金錢代納法 (the Tithe Commutation Act) (即ち、從來、英國に於いて教會維持、僧侶扶持の目的を以つて收穫の十分の一を徴して居つたものを貨幣を以つて支拂ふことを規定し、而して之れを評價する方法を指定せるもの、ウィリアム四世第六及び七年第七十一號) の通過に協力し、而して其の規定に據つてカンタベリーの大主教によつて委員に指名せられた。他の二名はウィリアム・ブレーマイヤ (William Blamire) 及びキャプテン・ウエントワース・ブラッ (Captain Wentworth Buller) であつて、政府によつて任命せられたものである。彼れは是れより以前よりして既に、僧侶として、又經濟學者として、其の注意を這般の問題に拂ひ、又、前掲『地代』に關する其の著書中に於いて、十分一稅の代納を以つて、種々なる理由に基いて得策であると説き、而して、曩きに擧示せるが如く、一千八百三十三年に、代納法私案を附せる斯問題に關する小冊子を公にして居つたのである。彼れは又、其の後、政府案の起草並びに其の進行に協力し、而して、一千八百三十六年、同案が議會に於いて論議せられた際、其の一般原理を擁護せる八折判の小冊子を倫敦に於いて出版した。Remarks on the Government Bill for the Commutation of Tithes. が是れである。彼れは又、僧侶の利益に影響する他の法案に注意を拂ひ、一千八百三十八年には八折判の小冊子 Remarks on the manner in which Tithes should be assessed to the Poor's Rate under the Existing Law; with a Protest against the Change which will be produced in that Law by a Bill introduced into the House of Commons by Mr. Shaw Lefevre. を公した。而して、ジョー・ルノーヴェルの法案は結局撤回せられることゝ爲つた。彼れは又、一千八百四十年、A Letter to the Right Honourable Sir Robt. Peel on the Bill introduced into Parliament by the Attorney-General to exempt all Persons from being Assessed as Inhabitants to the Parochial Rates. を倫敦に於いて出版した。彼れは一千八百

五十一年、十分一稅委員會が改組せられ、「公簿謄本不動産委員會」(Copyhold Commission)に合併せられて、獨立の存在を失ふに至る迄、其の一員として忠實且つ熱心に行動した。彼れは其の職を退くに際し、之れと關聯せる事業に關する覺書を草し、之れを其の後繼者の爲めに殘した。彼れは其の後、先づ僧會法委員會の秘書と爲り、次いで、英蘭及びウェールズの慈善事業管理委員の一人と爲り、其の收入を減少せしむることなきを得た。斯くの如き間に於いて、彼れは其の東印度學校に於ける講義を續行し、一千八百五十二年には Text Book of Lectures on the Political Economy of Nations, delivered at the East India College, Haileybury. 八折判一卷をハートフォードに於いて出版した。

ジョーンズは教授職を辭して後、間もなく、一千八百五十五年一月二十六日、ヘイリーベリーのコレッチ内に於いて死去し、隣接のアムウエルの墓地に葬られた。其の遺著は主として彼れの最も忠實なる友人にして又景慕者たるジョン・カズェノフツ(John Cazenove)によつて纂輯せられ、有名なる哲學者ウィリアム・ヒューエル(Rév. William Whewell)の一千八百五十八年十一月十八日附長文の序言を附して、同五十九年、倫敦に於いて六百二十頁の八折判として出版せられた。Literary Remains, consisting of Lectures and Tracts on Political Economy, of the late Rev. Richard Jones. と題するものが是れである。

三

ジョーンズは、其の『分配論』の長し序文に於いて、正統經濟學派に對する自己の立場を明確に宣言した。彼れは國民經濟學の黎明を重商主義的方策の論議中に認め、アダム・スミスの生産論上に於ける貢獻を注意し、而して、富の分配を支配する原理を取り扱へる諸家の努力が未だ充分なる成功を以つて酬いられることがなかつた旨を述べ

る。彼れに従へば、生産の研究は、堅實性と永續性とを有する政治的眞理の一體を表明することゝ爲つたのであるが、分配論の範圍内に於いては、是れ迄に、相撞着する諸意見が生じた外は、殆んど何等の法則も導き出されることがなかつたのである。(An Essay on the Distribution of Wealth, and on the Sources of Taxation, ed. 1831, pp. 11v.)。重農學派は、彼れ等が、地代の一部(純収益)は、是れよりして唯り國家の收入の總べてが直接若しくは間接に引き出されなければならぬ特殊の基本を組成する旨を誤つて主張せる點に於いて非難せられた。マルサスは、スミス以後に於いてより、以上の知識的進歩に對する基礎を置いた最初の哲學者であつた。最も進歩せる文明の階段に於ける地主の收入及び労働者の賃銀を支配する諸法則に關する最初の明確なる意見は、常に人口及び地代に關する彼れの諸著中に求めらる可きである。然しながら、マルサスは其の後繼者に於いて甚しく不幸であつた。彼れ等後繼者の論述によつて、マルサスの諸著は有用なる眞理の上部構造の基礎たらしめらるゝことなくして、却つて、不條理、不正當なる其れを建設するが爲めに使用せられた。マルサスは、土地が資本家によつて其の資本の利潤の爲めに耕作せられ、而して之れを隨意に他の用途に移し得る場合には、耕作せらるゝ最劣等地を耕すの費用は原産物の平均價格を決定し、而して優等地に於ける品質の相違は是れ等のものによつて生ぜしめられる地代を測定することを明かにした。然るに、リカードは歴史的性質を有する其の制限を遺脱した。即ち、ジョーンズの語を以つてすれば、彼れは「這般の原理が眞に適用せられ得可き範圍の限界を全然看過し、單に是れ等のものゝみから、あらゆる場所に於いて、又、あらゆる事情の下に於いて、土地より生ずる收入の本質及び高を支配する諸法則を演繹せんとした、而して彼れは是れを以つて満足せず、同一の狹隘且つ有限なる與件から出發して、財富分配の一般體系を構成し、而して、地球面の全般に互つて利潤率又は賃銀の高に變化を生ぜしむ可き諸原因を説明しようとしたので

ある。リカード氏は才人であつた、而して彼は頗る巧妙に純乎たる假設的眞理の頗る巧妙に結合せられた一體系を産み出したのである。然しながら、それが過去及び現在に於ける人類の状態と全然相容れざるものであることを明かにするが爲めには、單に現存の世界に對して博く一瞥を加へるを以つて足れりとするのである」(p. 117-118)。

ジョーンズを以つて觀れば、マルサスの人口論は尙ほ一層無殘に濫用せられた。マルサス自身及び其の祖述者は、彼れ等の取り扱ひつゝある要素の上に起り得可き重要な變化を觀過し、而して何等其の正當を證明す可きものない社會の將來に關する意見を發達せしめたのである。ジョーンズは、農業收益の假定的なる持續的減少、其の蓄積の進歩に及ぼす推定的な結果、斯くて又、其れ自體虚偽なる事實よりする誤れる推理に依る、之れに對應して人類が増加しつゝある總數に對して資源を備ふるの力なきことに關する觀念を排斥する。哲學者が一個の理論を解明せんとして驀進しつゝある際には、彼れ等の生息する世界によつて提示せらるゝ正誤に對して其の眼を閉じつゝあることが往々にして認め得られる。然しながら、人類全體は、普遍なる大原理が幾多の原因の亂雜なる作用の唯中に發見せらる可き方法に關する更らに健全なる見解に基礎を有する他の習性を有する。經濟學に在つて 普遍的と稱する定則が、唯り社會に對する最も廣汎なる觀察の上に確立せられ得るの事實を會得するが爲めには、毫も論理的鋭敏の多くを要するものではない。種々なる事情の下に置かれた人類の大集團の地位及び進歩を決定し、又其の行爲を支配する諸原理は唯り經驗に訴へることに依つてのみ探知せられ得るのである。洵に、單なる意識的努力に依り、自己の意見、感情及び動機と其の個人的觀察の狹隘なる範圍に諮り、而して是れ等のものよりして先驗的に推理するに依り、彼れ自身と精神的若しくは肉體的資質に於いて相違し、又、範圍を異にし、結合の態様を異にせる、氣候、土壤、宗教、教育及び政治の相違によつて影響せられる人々の大集團の行爲、進歩及び運命を豫知し得可し

と做す者は淺薄なる理論家でなければならぬ。然しながら、先づ個人の思辨から實際に存在しつゝある人々の集團によつて提示せられる經驗の結果に訴へると共に、吾人が云々し來つたものゝ如き、富の分配に關する定則に對する一切の信念は直ちに消滅しなければならぬ。吾人が其の眼を書籍から撤して、世界の統計圖に諮ふや否や、地代の最高なる國々は常に農業能率減退の徵候を現すものではなく、却つて、通常、最大なる人口が其の勞働者の最少部分の盡力に依つて、最大なる充實を以つて維持せられつゝあるものであることを吾人に知らしめるのである。而して、ジョーンズは又、より富裕なる國々及びより富裕なる階級は到る處に於いて他のものよりも人口増加の速度大ならざるものであることを舉示する。(p. vii-xviii)。

ジョーンズに従へば、這箇明確なる事實と經濟學者の結論の矛盾は所謂經濟法則をして著しく不信用ならしめたのである。人々は、經濟學の主題は餘りに複雑であつて、的確なる分析を許さざるものであると考ふるに至りつゝあつたのである。彼れは普遍的に有效なる經濟法則を發見することは不可能であると云ふ意見に與するものではない。彼れは單に總べて斯くの如き法則は觀察と歸納とによつて取得せられなければならぬことを主張するに過ぎざるものである。經濟學は、廣く且つ丹念に經驗に訴へて、普遍的なることを要求する總べての定則を樹立しなければならぬことが承認せられなければならない。主題と關係ある種々なる現象を生ぜしむるに協力せる混合原因は、諸國民史上に生起し、若しくは生起せるが儘に事件の觀察を反復するに依つてのみ分析せられ、檢討せられ、又、徹底的に悟了せられるものであつて、極めて稀有なる場合を除いては、決して豫考せられた實驗に付せしめらるゝことを得ざるの事實が確かに記憶せられなければならない。而して、吾人は斯くの如き主題に關する知識の進歩が困難であり、且つ徐々でなければならず、又、それは觀察せられる界域の範圍、是れに由つて表示せられる結果の複雑錯

綜の程度に殆んど正確に比例するものであると云ふ不可避の結論によつて後込みしてはならぬ。而も猶ほ這般の顧慮は十分なる戒心の理由を供するものではあるが、是れ等のものと雖も、全然絶望す可き理由を與へるものではない。却つて、歸納的科學が完成に向つて進んで來た常道に於いてよく教育せられた人々には、吾人が依據す可き資料の豊富及び多様其れ自體が、確固たる希望に對する合理的基礎を與へるのである。過去に於ける失敗の原因は、歸納哲學の創始者ベーコンの『新オルガノン』中に於ける警告に耳を傾けることなく、歸納(Induction)の道よりも豫想(anticipation)の其れを選び、是れに由つてのみ唯り知識が安全に獲得せられ得る不可避の條件、命ぜられた勞作を忌避し、一般的原則を確立せんと努むるに當つて、隱忍持久、事物の調査に没頭するの義務を廢棄することが餘りに早急なるに存するのである。斯くて、眞理が逸脱せられるに至つたのは、此の錯雜した問題に於いてすら、人類の歴史と状態とに關する確實綿密なる調査が眞理を表明することがないが爲めではなくして、誤謬を流布することの最も大であつた人々が全然斯くの如き検討を遂行するの任務を事實上回避し、彼れ等が其の推理を打ち建てた觀察を、直接に彼れ等を圍繞した地球面の小部分に局限し、而して後、直ちに全然虚妄なるか、若しくは部分的に眞實であるとしても、其の資料が蒐集せられた境界と等しく其の適用に於いても亦、局限せられた學說及び意見の上部建築を建設しようとするの舉に出たことに基因するものである。(pp. xviii-xxiii.)

斯くてジョーンスは別箇の計畫の上に其の書を著さんとしたのである。彼れの目的は、土地及び人類の勞働に依つて年々生産せられる富の分配を支配する原理並びに種々なる事情の下に生存しつゝある人々の集團中に這般の原理の作用によつて生ぜしめらるゝ結果を見んとするに在つたのである。而して、彼れは過去及び現在の經驗のみが、唯り、這般の主題に關して、將來に關する豫想に對して何等かの確實なる基礎を與へることが出來ると云ふ確乎

たる自信に導かれて之れを行はんと努力したのである。(p. xv.)。而して、彼れは其の書中に於いて、經驗の基礎の上に一定の實際的原理を建設したと信じたのであるが、而も猶ほ、彼れは啓示せられ説明せらる可き多くのもの、殘存せることを認めてゐる。斯くの如き過程中に於いては、全體系の餘りに匆急なる設定、嚴然たる普遍性の早熟なる表明に對する浮躁なる渴想は、恐らくは依然として最も警戒す可き誤謬の根源と爲るであらう。最初先づ安全に取得せられ得可き眞理の部分は、必然、慎重且つ堅忍なる態度を以つて遂行せらるゝ經驗の限定せられた界域の上に設定せられた狹隘なる原理でなければならぬ。一層科學的單純性を有する更らに廣汎なる普遍性は、是れ等の中間的眞理が通達せられた後に於いてのみ、唯り幾及せられ得可きものである。ジョーンスは、斯くの如きものを以つて、眞正且つ永久なる科學に取つて豫定の行程であると觀たのである。洵に、觀察と歸納とを通じて眞理に到達するの道程は、遅々として捗らぬ困難なものではあるが、其の長い並樹を通じて、最後の勝利の楽しい光景を展望することは、少くとも、此の道を行く人の特權である。(pp. xvii.)。彼れは又、前掲『經濟學序講』に於いても、「吾人にして若し世界の種々なる國民が、其の收入を生産し若しくは分配する經濟と配備とを熟知せんことを欲するならば、余は洵に吾人の目的に到達する可き道が唯だ一筋であることを知る、而して、そは觀、又視るに存する」と説く。(Literary Remains, op. cit., pp. 568-569.)

四

斯くて、ジョーンスは、其の歴史の見地に基き、正統學派の郷土たる英國に於いて、恰もリカード流の經濟學說が次第に成功を收めつゝあるの時に當つて、其の結論、殊に地代に關するものは唯り最近の時代及び最小の地域にのみ適用せられるに過ぎざるものであることを主張したのである。既にリカードの地代說に對する反對意見は、

トマス・ハバート・ペルサスによつて其の Principles of Political Economy considered with a view to their practical Application, 1820. 中に表明せられ、(昭和十二年版拙著『經濟學史』五三三—五四〇頁参照)、其の翌一千八百二十一年の著に於いて、ジョン・クレーグ (John Craig) は、地代説を論評して、土地よりの収入と資本よりの収入との間の類似を注意し、(Remarks on some Fundamental Doctrines in Political Economy illustrated by a Brief Inquiry into the Economical State of Britain since the year 1815, p. 138.) 又、一千八百十四年七月に The Farmer's Journal. 誌上に發表せられた其の論文に於いて、穀物價格騰貴の原因を論じ、而して十四年十一月に起草せられ、翌十五年二月に公にせられた同誌上の論文に於いて「最悪地上に於ける穀物生産の費用は自然價格の調整者であり、又、土地の地代は生産に資する諸經費及び資本の普通の利潤が控除せられた後に残存する純粹なる餘剰收益である」と云ふ學説を表明せる點に於いて地代學説の最初の構成者と看做されてゐるジョン・ルーク (John Rooke) は、是れ等『農民雜誌』誌上の諸論文を基とした其の一千八百二十四年の著 An Inquiry into the Principles of National Wealth, Illustrated by the Political Economy of the British Empire. に於いて、リカード才が、一時的、具體的事實を觀過せることを非難して居つたのであるが、遂にジョーンズに至つて、種々なる國に於いて看出され得るか、若しくは相異なる時代に於いて存在して居つた相異なる土地所有權の形態から其の地代論を出發せしめたのである。

ジョーンズは地代の起源を、人類の最も不精鍊なる労働に對してすら、耕作者自身の生活に取つて必要なる以上のものを生ずる大地の力に歸する。而して、這般の力は、土地が一旦私有財産に移るや、其の耕作者をして所有者に一定の貢納 (tribute) を支拂ふことを得せしめる。(p. 4.) 彼れは、最良の土地が最初に耕作せられ、而して、よ

低き沃度の土地に依頼し若しくは減少せる收益に於いて最良の土地の耕作に附加的資本を適用するを必要とするの時、地代は初めて發生すると做す地代の起源に關するリカードの學説に反對した。彼れに従へば、斯くの如き事態は起ることがあるかも知れぬ、それは抽象的可能事である、而も、世界の過去の歴史と現在の状態とは這般の事態が實際的眞實ではなく、又、曾つて實際的眞實であつたこともなかつた事、及び政治哲學の諸體系の基礎として之れを假定するは單なる妄想に過ぎない事を明かにする夥しい證據を與へる。(p. 5.) 彼れは較差地代とは全然別箇の絶對地代の存在することを認めたのである。即ち曰く「現實の人間社會の進歩に於いては、人民の多數が、彼れ等の取得し得るが如き條件に於いて土壤を耕作するに非ざれば、餓死せざるを得ざるに至つた時、又、彼れ等の道具種子等の乏しい資本が、農業以外のあらゆる他の職業に在つては、全然彼れ等の生計の資を確保するに不充分なるが爲めに、堪へ難い必要に驅られて土地に其の身を束縛せられた時、地代は土壤の領有に於いて發生するを常とする。然らば、彼れ等を驅つて地代を支拂ふに至らしめた必要は、彼れ等の占有する土地の品質に於けるあらゆる相違から全然獨立したものであり、又、土壤が總べて平等ならしめられたとしても除去せられないものであらう」(p. 11.)

ジョーンズは、次いで、相異なる土地保有制度の下に於ける現實の地代形態を探求して、資本主義的制度的下に於ける其の最後の態様に及ぶのである。(前掲拙著五四九—五五五頁参照)。資本主義は非農業階級に始まるを常とするものであり、初めて自己を資本家の管理の下に落ち着けたものは工匠及び手工業者であつたが、後には農業に迄も及ぶことゝ爲つた。斯くの如き變化から生ずる直接の結果の一は、農業に使用せられた労働及び資本を隨意に他の職業に移し得ることである。而して、勞作階級を土地の上に使用するによつて、斯くの如き社會状態に於いて

は夥多なる、種々なる他の仕事に於ける彼れ等の努力よりするに等しいものを取得せられ得るに非ざれば、耕作の業は廢棄せらる可きである。地代は斯くの如き場合には必然單に「餘利利潤」(surplus profit)、即ち土地の上に資本及び労働の一定量を使用するによつて、あらゆる他の職業に於いて是れに由つて取得せらるゝを得可きもの以上を取得せられ得る總べてから成るのである。(p. 188)。彼れは最劣等地に對する地代の存在を認め、而して是れを以つて單に稀少なる自然の賜たる土地に於ける私有權の存在に基くものと觀たのである。

ジョーンスは、地代が餘利利潤から成る際には、特殊地點の地代が増加す可き三個の原因の存することを認める。第一は、其の耕作に於ける資本のより大なる定量の蓄積に基く收穫の増加、第二は、既に使用せられた資本のより有效なる適用、第三は(資本及び收穫が依然として變化なき場合に於ける)、這般の收穫に於ける生産階級の配分の減少、並びに之れに相應する地主の配分の増加である。(p. 189)。リカードは唯り第三の原因の作用に關して論ずるに過ぎない。然しながら、ジョーンスは、一度び地代にして存するならば、それは土地の相異なる部分の沃度に於ける何等の變化なくして起ることが出来ると思へる。彼れは現在に於いては收益遞減法則と稱せらるゝ所のもの、即ち彼れの語を以つてすれば、「農業資本の力は必然使用せらるゝ量の増加に連れて減少すると做すの意見を排斥する。彼れは、斯くの如き意見を以つて、耕作技術に於ける改良によつて無効ならしめられたものと看做すのである。(p. 197-200。前掲拙著五五七—八頁参照)。彼れは又、リカードが想像するの已むなきに至れるが如く、農業に於ける總べての改良が地主の利益に反するものでないことを論證する。人民の總數は徐々に増加するが故に、吾人は、需要の漸次的壓迫は農業家を刺戟して改良を行はしめ、而して這般の改良は供給の知覺し得ざる程の前進によつて永く人民を給養するを見るのである。斯くの如き過程が繼續しつゝある間に、舊土壤に對するより多くの

資本の一般的適用によつて生ぜしめらるゝ收益のあらゆる増加は、其の本源的沃度の相違に従つて、相等しからざる効果を以つて是れ等のものゝ上に作用して、地代を引き上げるのである。而して、地主の利害は如何なる場合に於いても改良に對立するものではなく、改良は、それが原産物の高を増加するの際に、人民の福祉に取つて缺く可らざるものであると等しく、又、其の土壤の所有者の収入増加に役立つものである。(p. 212)。

ジョーンスは、地主の利害が常に其の社會に於けるあらゆる他の階級の利益と相反すると做すリカードの悲觀的理論を反駁して彼れの論述を結んでゐる。彼れは、地主が偶々他の階級の損失に於いて利得することある可きを認める。然しながら、彼れは資本家及び労働者も亦、往々にして其の社會の自餘の者の其れと相反する利害を有し、地代が生産階級の収入の蠶食によつて高められることがあると等しく確實に、賃銀が利潤の減少によつて増加せしめられ、又、利潤が賃銀の減少によつて膨脹せられることのあるは異議なき所であると觀た。彼れは地主の社會的地位と國家を構成する他の階級の其れとの間には、何等の相違も存せざるものであると云ふ結論に到達する。(p. 288。前掲拙著五六〇—二頁参照)。而して、地主の利害は不可離的に彼れ等の借地人及び社會全般の其れと連結せられてゐると做すジョーンスの法式は、彼れによつて反駁せられたリカードの其れと等しく誤解せられ易いものであると稱せられてゐる。

そは兎に角として、彼れの地代説に於ける偉大なる業績は、リカードの地代説の根柢を成せる社會的基礎を明示した點に存する。彼れは種々なる社會組織の歴史的性質を主張した。彼れは經濟的活動の普遍的範疇と其の暫時の社會的表現との間の特異點、總べての社會組織に共通なるものと、社會組織に於ける相違の結果として現れる相異なる形態との間の特異點を露呈せんことを切望した。彼れは歴史の過程に於いて現はれる社會的生產の種々なる形

態の間に區別を立てた。彼れは是れ等のもの、一致と等しく其の相違をも示さんことを努めた。彼れは、地代が決して單一なる原理に依つて説明せられることの出来ぬものであり、種々なる原理が、種々なる時代に於いて、又、種々なる事情の下に於いて作用し來つたと云ふ結論に到達した。彼れは、地代を一定の種類に分つて考察するに由つてのみ唯り之れを了解し得可きものと觀た。個人所有權と自由競争の推定に基く理論は、共同所有權を原則とし、地代が慣習に由つて規制せられる東洋の社會狀態、若しくは又、分益農制度に見るが如く、土地が慣習的小作法に據つて保有せられる比較的英國に接近せる邦國の場合に對してすら適用し得ざるものである。等しく又、時の上から言へば、リカードオの法則は、土地が大部分共同に保有せられ、其の所有者と耕作者との間の關係が自由競争によつて支配せられることのない中世的經濟狀態には適用せられないものである。斯くて、彼れは、地代を、種々なる國民の間に存する所に従つて、勞働地代又は隸農地代、分益農地代、ライアット地代、コッチアー地代等のペザント地代及びファーマー地代に分つ。斯くの如き主題の取り扱ひ方は、彼れが「諸國民の經濟學」と呼び慣はした所のものである。

五

彼れが「地代」に次いで公にしようとした其の著の部分は「賃銀」であつた。蓋し、彼れが地球の經濟的狀態に關する世界誌的調査に依つて、勞働者の種類、賃銀が種々なる國々に於いて取る形態及びそが社會の上に生ずる結果は、地代の其れの如く様々なるの觀あるが故である。恰も、彼れが地代を一定の種類に區分したが如く、彼れは又、勞働者を種々なる國々に於ける彼れ等の狀態に従つて三大種に類別した、即ち、第一は、耕作農民として其の占有する地所を耕耘し、而して、自ら産出しつゝある賃銀(self-produced wages)に生活する雇傭せられない勞働者、第二

は、其の雇主の收入(Revenue)若しくは所得から直接に支拂はれる勞働者、第三は、其の雇主の資本(capital)から支拂はれる被傭勞働者である。(Literary Remains, op. cit., pp. 13-14, 80-81, 115-116. 前掲拙著五六四—五頁參照)。彼れは此の主題に關する資料及び思索の夥しい高を書き留め、而して之れに關する其の著の第二卷を出版するの準備が殆んど成つたと自信することも時折はあつたのであるが、前述せるが如き他の勞作に追はれて、終に其の企圖を實現することが出来なかつた。

然しながら、曩きに一言せる倫敦キングス・コレッジに於ける彼れの「經濟學序講」は恐らく彼れの述作中に看出さる可き其の經濟學原理の最良なる一般的梗概を含有するものであつて、此の講義中に於いて、彼れは、生産と分配との間の關係に就いて云々し、種々なる國々の富が分配せられる種々なる階級に關する考察を行ひ、而して其の政治組織が其の經濟組織によつて支配せられる態様を指示したのである。彼れは、經濟學の二主要部分たる生産及び分配の中、其の當面の目的の爲めには、最初に分配を考察するを以つて便宜と思惟した。固より、生産は實際上分配に先き立たなければならぬ。然しながら、一定の富は、何等かのものが分配せられ得る以前に生産せられなければならぬのであるが、一人民の進歩の初期の段階に於いて採用せられた其の土地及び勞働の産物を分配するの形態及び様式は、幾時代の間其の跡を探ねることの出来る社會の性質及び習慣の上に影響を及ぼすものであつて、それは多數の場合に於いて斷じて消滅せしめられることなく、而して、這般の影響は、吾人が種々なる國民の生産力及び作用に於ける現存の相違を充分に説明し得るに先き立つて了解せられ、又、斟酌せられなければならぬ。種々なる國民が採用するに至らしめらる可き其の收入を分配する様々の様式を探求し、且つ類別するは困難なるが如くにして、而も然らざるものである。人類の最初の所要物は食衣であり、而して、大地は耕作者の勞働に對して彼れの生

存及び其の家族の其れに取つて十分なる以上のものを産出するが故に、餘利は他の階級によつて領有せられることが出来る。斯くて、社會の階級的分岐は生ずる。而して、這般の餘利の分配が生ずる様式、之れを消費する階級の本質は、其の社會の將來の性質及び習慣の最初にして且つ最有力なる原因である。(Literary Remains, op. cit., pp. 552-553.)

シ・インズは又、英國に於ける商業の效果に關する意見の進歩を略説し、「取引の平衡」(balance of bargain)と「貿易の平衡」(balance of trade)との差違を明にした。(初め Edinburgh Review. 〇一千八百四十七年四月發行第百七十二號に掲載せられ、後、其の『遺稿』の二百九十一―三百三十五頁に再刻せられた Primitive Political Economy of England. 參照)。彼れは這般の主題を取り扱ふに當り、一般に知られてゐない典據を羅列し、誇示することがなかつた。エッジワース(F. Y. Edgeworth)は彼れを以つて單なる編年史家に非ずして、哲學的歴史家であつたと稱し、彼れを以つて當さに英國歴史學派の始祖と看做さる可きものと説してゐる。

六

シ・インズの創橋在學時代に於ては、フランシス・ベーコンの Novum Organon は彼れらの同窓學徒の最も愛好する論題の一であつた。彼れがハーシェル(Sir John Frederick William Herschel)・ローレン(Rév. William Whewell)及び其の他將來の碩學との交遊は、實證的歸納的知識を愛するの念を彼れの中に培養したと稱せられてゐる。前者は Discourse on the Study of Natural Philosophy, 1830. 〇著者であり、後者は History of the Inductive Sciences, 1837. を著せるものとせらる。(Whewell, op. cit., pp. xix-xx.)。エッジワースは經濟學に於けるシ・インズの役割を以つて、自然科学に於けるベーコンの其れの如く、經驗の重要と早急なる概括の危険を訓ふる

にあつたと説いてゐる。經濟學者としてシ・インズは強烈にリカード及び其の他の者の演繹法に反對した。彼れは其の主著『分配論』に於いて、彼れ等の方法に對する敵意ある批評と更らに徹底的に歸納的なるものによつて彼れ等の研究に取つて代らんとするの企圖に従事したのである。洵に、エッジワースの語法を以つてすれば、シ・インズに取つては、リカードの方法は、アリストテレスの其れがベーコンに對するよりも異論あるものであつたのである。彼れの著作は其れ自體に於いて價值あるものではあるが、然も、彼れのリカードに對する論難攻撃は屢屢誤解に基くものであり、又、之れと同時に、リカードの原理が唯り英國にのみ適合するものであつて、他の諸國には當てはまるものでないことを明かにするが爲めに彼れによつて提供せられた證據は、さしてリカードの論述の效用を減損するに役立つことのないものであつた。吾人が地代を以つて土地に對して行はるゝ支拂を意味するものと解するならば、土地が支拂に對して保有せらるゝあらゆる特殊の制度に對して別箇の地代學説が存しなければならぬことは疑ひもない所であるが、而も、吾人にして若し地代を以つてあらゆる較差的利益に對する支拂を意味するものと解するならば、然らざるものである。若し、或る特殊の土地保有制度の下に於いて、借地人が其の保有地の一定の較差的利益を支拂なくして享有するならば、吾人は是れ等のものが慣習的權利によつて彼れに屬すると稱するを得可きである。斯くの如き場合には、彼れは其の土地の眞の經濟地代の一定配分を保有するものと稱せらる可きである。

シ・インズの經濟學上に於ける最大なる成績は、彼れが夙に一千八百三十年代に於いて歸納法の必要を承認せるに存する。彼れは此の時代の英國に於ける歴史的方法の孤立的代表者と言はれてゐる。彼れは經濟學者が須らく經濟制度間の歴史的相違に對して更らに大なる注意を拂ふ可きことを勸告した。彼れは正統派經濟學者の多數によつ

て採られた狹隘なる見解が、斯學の最も重要にして且つ興味ある方面の一たる經濟的影響と社會制度との間の關係を無視せることを論難した。彼れは、經濟學者等が、人類將來の幸福及び繁榮に貢獻する所最も多き諸制度を會得し而して之れに關して爲政家に勸告するを得るが爲めには、須らく歴史的精神を有して、人間社會發達の過去の經路を觀察す可きことを力説した。斯くて、彼れと略ぼ同時代の人、オーギュスト・コントが、經濟的現象の他の社會的事實と交錯すること極めて大であつて之れに關する別箇の科學を構成するを以つて不可能と認め、經濟學が他の諸學と並んで單に其の一部門たるに過ぎない總括的社會科學即ち「社會學」を創設せんとしたに反し、彼れは社會學を以つて經濟學の一部門と看做した。彼れは又、經濟法則の相對性を強調し、而して之れを顧みざるの故を以つて正統學派を非難した。彼れは、制度及び慣習が、リカードオによつて分析せらるゝが如き經濟的勢力の實際に無効なるが如き社會を取り扱ひつゝある際には、一般經濟法則は興味あるものでも、又有用なるものでもないことを主張した。爰に後年のフリードリッヒ・リストの語氣が窺はれる。然しながら、彼れは、事實上、アダム・スミスと歴史學派の中途に立つものである。彼れは、ゴンナー(E. C. S. Gonner)の言ふが如く、歴史的なるに於いて前者に優り、後者に劣る。彼れは本原的典據に依頼することがなかつた。彼れはベーコンと等しく、何等極めて顯著なる發見によつて彼れの新方法を實證することがなかつた。彼れの著作は如何なる新原理をも確立せるものと稱せらるゝを得ざるものである。是れ等のものは曩きに構成せられた他のものに修正を加へたに過ぎざるものであつた。

マカラックの如きリカードオの忠實なる學徒は、固よりジョーンズの『分配論』の價值を認めなかつた。彼れは其の『The Literature of Political Economy, 1845.』に於いて、本書を以つて、主としてリカードオによつて説き明

されたが如き地代理論に對する筋違ひにして不適當なる批評の引き續きから成るものと做し、恐らくは此の著に就きて一言するの必要は殆んどなかつたであらうと稱してゐる。(p. 33.)。ジョン・スチュアート・ミルは其の『原理』に於いて一再ならず彼れの著を引用しながらも、其の價值を認めることが甚だ不充分であつた。(Mill, Principles of Political Economy, ed. Ashley, 1917, pp. 252, 307, 310, 316.)。獨逸歴史學派の著者ウイヘルム・ロマン・イースらも、彼れを以つてリカードオの地代説を充分に理解しなかつたものと做してゐる。(Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland, 2. Aufl., 1924, S. 844.)。而も、本書は今や、資本主義制度の一特殊問題たる地代の詳説に其の歸納的方法を使用せるものとして經濟學史上に於ける其の地位を承認せられやうとしてゐる。

(附記) 吾人は、リチャード・ジョーンズの『分配論』に就いては、昭和十二年版『經濟學史』上卷に於いて稍や詳細なる解説を行つた。然るに、今、遊部、鈴木兩氏の苦心に成る本書の邦譯上梓せられんとするを聞き、需めらるゝが儘に爰に再び之れが解題を草することとした。吾人は固より全部稿を新にし、曩きに幾分詳細に紹介した點は、能ふ限り簡單に敘述することとしたのであるが、而も猶ほ、幾分同一の引用を行ひ、同一の記述を爲さなければならなかつた。